

「要するに鈴木王国の最大禍根は、没落した一群の戦争成り金と同様に、急激に手を広げすぎて、人も組織もその大発展にマッチし得なかつたのである。」

（『海鳴りやまざ』第三部）

直吉自身の見解は、鈴木倒産の一原因是「統制力の喪失」、第二

は「深刻な不景気と資金の固定化」である。

が、実は鈴木商店再建案はひそかに資金パイプの台湾銀行から示されていた。条件のひとつに金子直吉の退陣があった。それをのめば鈴木は救われるという瀬戸際にきても、よねと岩次郎は「金子直吉は鈴木の功労者である。切ることはできぬ」として、直吉と鈴木の運命をともにする決断をした。終始私心なく主家のためにのみ働いた直吉に報いるため、よねと岩次郎は、王国の終えんをもいとわなかつたのである。あとにもさきにも例をみぬ幕切れであった。

すべてが終つてのち、よねが洩らしたひと言は、「かねてからわかつてはいたけど、エレベーターミたいで、降りてしまふまでは気持わるいものやなあ」

「かねてからわかつてはいたけど、エレベーターミたいで、降りてしまふまでは気持わるいものやなあ」

よねは、須磨御殿をただちに引き払い、岩次郎の妻兎三の親のために建てられた塩屋の邸に移る。

塩屋での十年余は、短歌づくり、魚釣り、草花づくり、碁並べ、鼓など数多い趣味と、神仏参りを熱心にした。多くの日本人同様、よねは神・仏に手をあわせ、己の今日を感謝するのである。また、この国に生まれたことの感謝は、皇居の庭園清掃奉仕団に加わることで表現した。

相変わらず粗食であり、身じまいは、隙なくきつちりとした。外出のときはいつも金の水筒を女中に持たせた。訪問先の人物に失礼になら

鈴木商店が幻のように消え去つて、六十年にも達しようという現在での、これは実話である。

#### 参考文献

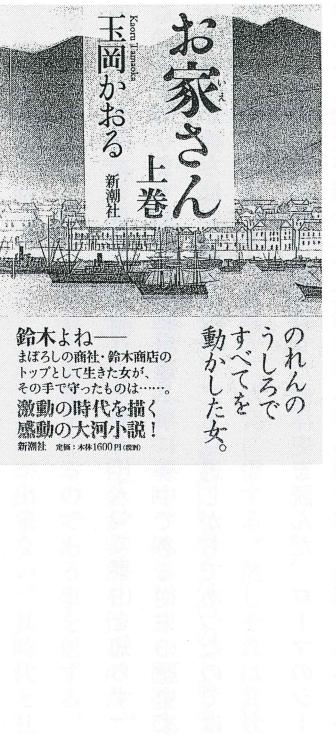
・『海鳴りやまざ』第一・二・三部 神戸新聞社編 神戸新聞出版センター

昭和五十二～五十四年

・『柳田富士松伝』金子・柳田両翁頌徳会 昭和二十五年

・『総合商社の漂流 鈴木商店』桂芳男著 日経新書 昭和五十二年

・『黒い米』武田芳一著 のじぎく文庫 昭和三十八年



#### 玉岡かおる氏 著書

#### 「お家さん」(上・下) 紹介

巨大商社鈴木商店の女店主鈴木よねの人生を著した

大作です。玉岡さんは辰巳会の全国大会、例会に数回出席され、最初の時には執筆始めて一年半になるが完成にはまだ時間がかかるお話しをされていましたが、完成出版が平成十九年十一月二十一日に、なんと三年を要するほど執筆に苦労をされたお話しがありました。

大番頭金子直吉さんをはじめとして、皆がよりどころにしていた「よねさん・お家さん」を小説の視点から著していることに、読者を惹きつけるものがあります。

よね刀自の人となりを本号9ページに載せておりのを心に留めて、玉岡さんの「お家さん」を読んでいただくと一層興味ある著書になることでしょう。

この玉岡さんの著書が将来に大河ドラマに採り上げられるることを願いたいです。

ぬよう、事前に持参の湯ざましで口をすすぐのだ。

千代子氏は肉親としての目でもって、よねを平凡な女、と言う。が、

ことにのぞんで、動じぬものは、氣骨のある大物といわれるるのである。

死もまた、大物といわれるのにふさわしく、昭和十三年五月六日

「きょうはちょっとしんどいな」と早目に床に就き、再び起きなかつた。歓心症と診断された。八十七歳の生涯を通じ、便秘症というほかは、大正年間にコレラに感染したきり、病気らしい病気はしたことがなかつた。

直吉は一夜のうちに、長文の弔辞を認め、よねの靈前に捧げた。男も瞠若<sup>どうじやく</sup>するよねの偉業をたたえた。

——刀自は居常甚だ閑雅謹直にして温容自ら任じ喜ぶことあるも怒ることなく自誠することあるも人を責めず而うして部下の愛育に努めたるも——

と、婦徳の大であったことをたたえ、事業の回復ができなかつたことを嘆き詫びてもいる。よねは、事業には直接何ら関わらなかつたが、働きよい環境は作った。店員たちの妻の教育もした。妻たちに無用の競争は厳に禁じ、新年の祝賀や、園遊会などに、妻たちが着用するのは、よねが与えた同じ紋入りの着物であった。鉄色がかつたねずみ色の着物のみの姿は、鈴木商店婦人部の制服でもあつた。

鈴木関係者で、辰巳会という親睦会が作られていることは先に書いた。昭和五十九年現在会員二百六十三名、七十六歳から九十八歳まで、高齢者ばかりであるのは当然だが、年に何回か催される会合には、物故会員の妻女が現われる。

「ほんとに、働きよい職場だった、と主人が死ぬまで言つてましたんで、どんな人たちがどんな話をするんだろうか、と話を聞きにきます」